『海辺のカフカ』に内在された隠蔽の構造

ー「予言」と曖昧さに隠蔽された暴力と關係づけの問題ー

金 周 賢*
ku99jh@hanmail.net

Contents

1. 序論ー『オイディプス王』と『海辺のカフカ』は似ていない
2. 本論
3. 結論ーカフカ少年は「治癒」されるのか

Abstract

カフカ少年の父である田村浩一は彼の息子に呪いに近い「予言」をし、それはカフカ少年を通じて発話される。カフカ少年に与えられた予言は明らかに「オイディプス王が受けた予言とまったく同じ」ようにみえる。しかし相異なっている二つの作品を類似していると理解するようになることは、すでに似ていていると選定されているテキストを持って共通点を探していこうとすることだ。ここに二つの作品の間に存在する差を見えなくする、隠蔽の構造が隠されている。

『海辺のカフカ』で提示された予言で重要なことはそれがカフカ少年に与えられて発話された瞬間、小説内でプロットとして作動し始めるという点だ。予言は、いつか成り立つとかあるいは必ず成り立たなければならないことで存在するので、ひいてはそれが含めている内容その自体には注目することができなくする。その予言内の暴力性とそれを行う個人の意志は注目されることがなくなるのだ。

カフカ少年の暴力性、そしてそれを隠蔽する「予言」と共に忘れてはいけないことは、『海辺のカフカ』の中の事件に係わる対象たちの間の「関係を結ぶこと」それ自体がとても暴力的に成り立つという点だ。そういう暴力的関係結びの試みは大きく目立って現われない。それは各事件から加害者に設定された人物とその暴力の被害者に設定された人物の主客関係がはっきり現われないまま、「予言」の実行として受け入れられるからだ。三番目の事件では客体に設定されている人物たちは各事件に接する方式や主体に設定された人物との関係が少し異なっているように設定されているにもかかわらず、「予言」という枠組みは皆を同じ方式で成り立つ事件であるように現われる。

『海辺のカフカ』の結末にとっての疑問点は、カフカ少年は「癒し」になるのができるかと

＊ 高麗大學校大學院 日語日文學科 修士課程

いうことだ。彼が実際に予言を行ったら彼は与えられた予言を回避することができない、自由な意思決定が不可能な存在であることを示すと同時に他人に対する「加害」を通じて自分を「治癒」するというアイロニーを見せるからだ。またもしそれが実際に起こった事がないなら彼は結局何もせずに癒されたわけなのだ。

Key Words ：予言、隠蔽、暴力性、主客関係

1. 序論－『オイディプス王』と『海辺のカフカ』は似ていない

カフカ少年の父である田村浩一は彼の息子に呪いに近い「予言」をし、それはカフカ少年を通じて発話される。

> 僕はいう。「**お前はいつかその手で父親を殺し、いつか母親と交わることになるって**」[1)]

この予言に対して小島さんは父親の殺害の可能性を恐れるカフカ少年に、オイディプス神話を通じて説明しようとする。

> 「君はいつか君の手でお父さんを殺し、いつかお母さんと交わることになる－そうお父さんが言ったわけだね」
> 僕は何度かうなずく。
> 「それはオイディプス王が受けた予言とまったく同じだ。そのことはもちろん君にはわかっているんだろうね？」[2)]

彼女が指摘するように、カフカ少年に与えられた予言は明らかに「オイディプス王が受けた予言とまったく同じ」ようにみえる。同じ予言が存在することで二つの作品はお互いに繋がれているように提示され、カフカ少年をめぐっての事

1）村上春樹『海辺のカフカ 上』（新潮文庫、2005）426頁、強調原文
2）村上春樹 上掲書 427頁

件はまるでオイディプス神話の予言に添って起きるかのように展開されて行く。小森陽一も『海辺のカフカ』に提示された予言の原型としてこれに言及しながら[3]、二つの作品の　中の人物たちをその性格によって相互比較、マッチさせている[4]。

しかし二つの作品に提示された予言の内容は実際に同じではなく、同時にその構成上、二つの作品の人物をマッチさせるのにも多少無理がある。カフカ少年に与えられた予言にはオイディプス神話にはない姉の存在が含まれており[5]、相互マッチされた人物は各個体の属性上の類似性を持つ面はあるが、マッチされた人物たちとの関係においては二つの小説の構造が違うからだ。

結局相異している二つの作品を類似していると思い込むようになるのは、小説内で事件の原型になる神話を直接的に提示しているからだと言える。すなわちそれぞれの人物設定と背景、事件の発生と構造の比較を通じて、お互いの共通点を探し出して「似ている」のを確認するのではない。すでに類似していることによって選定されたテキストを持って共通点を探していこうとする方法論だが、ここに二つの作品の間に存在する相違を見えなくする、一番目の隠蔽の構造が隠されている。

『オイディプス王』神話と『海辺のカフカ』は等しい内容の予言と、その予言から逃れることができないという、運命論以外には共通点が見いだされない。よって『海辺のカフカ』をより正確に読むためには予言がどのような方式で存在しているのかを作品内に限定して確認し、予言それ自体が小説のどんな側面を隠しているのか、またそれが何によって支えられているかをより詳細に考察して見る

---

3)「まず始めに、物語や小説の原型となる神話について考えてみましょう。問題にするのは有名なオイディプス神話です。『海辺のカフカ』では、登場人物相互の間で、オイディプス神話についてはっきり言及されており、この神話が小説の主題の一つになっているということが読者に明示されています。」(小森陽一、『村上春樹論』平凡社、2006、18頁)

4) 小森陽一は、二つの作品の主要な人物の役割を相互比較しています。たとえば、田村　浩一を神話の中のライオスに、カフカ少年をオイディプスに、佐伯さんをイオカステに相当しています。(小森陽一、『村上春樹論』平凡社、2006、24~26頁)

5)「でもそれだけじゃない。もうひとつおまけがある。僕には6歳年上の姉もいるんだけど、その姉ともいつか交わることになるだろうと父は言った」

― 中略―

「.....僕は父を殺し、母と姉と交わる」(村上春樹、前掲書、427頁)

必要があると思う。

2. 本論

1.「予言」は暴力性をどのように隠蔽しているか

1-1 カフカ少年の殺人衝動

『海辺のカフカ』にて提示された予言で重要なのは、それがカフカ少年に与えられ発話された瞬間、小説内でプロットとして作動し始めるという点だ。予言は、いつか成り立つか、あるいは必ず成り立たなければならないこととして存在するので、これによってすべての事件が発生するかのように見え、ひいてはそれが含まれている内容それ自体には注目することができなくなる。それは父を殺し母、姉と関係を結ぶという、人間としてもっとも重大な暴力と言え、殺人とタブー破壊問題を扱っているにもかかわらず、小説はただ予言の提示のみを認識させ、カフカ少年が「どう」予言を実行するかにだけ焦点をあわせていく。すなわち、その予言の暴力性とそれを行う個人の意志は注目されないように巧妙にずらされている。カフカ少年が予言の成就を「仕方ないこと」程度のものとして意識する間、事件は起こり、その予言の根底を成す暴力性とそれをカフカ少年が自己の防止しようとせず、むしろ自らの意志によって予言の一助するという点は明確に現れていない。

カフカ少年において田村浩一、すなわち父という存在はカフカ少年のアイデンティティを規定し、その運命を予言することで、彼をあるフレームに束縛させる存在として表象される。「父を殺して母と姉を犯す」という命題は結局、カフカ少年が自分の生において「自分は誰か」という問いを自らに投げかける時、その問いの意味を無効化させる根源的な装置として作動する。

したがってカフカ少年が自分自身のアイデンティティを見付けた後、起るすべての事柄を予言によってでなく、自らの選択によって規定しようとすれば、自分の運命として与えられた予言を「欠落」させる必要がある。15歳の誕生日の家

出と自らにカフカという名前を付けることは、その予言に属しないための努力の一つとして把握することができる。しかし逃れることだけでは予言から逃れることができない。カフカ少年の顔のあちこちには、また血には彼の「父の遺伝子がそのまま残って」いて、予言はカフカ少年の意識に存在することですべての自由な行動と思考を邪魔する枠として作動するからだ。ここに予言の発信地を探して消去しなければならない必要性が与えられる。カフカ少年の家出当時の姿は次のように描かれている。

> 家を出るときに父の書斎から黙って持ちだしたのは、現金だけじゃない。古い小さな金のライター(そのデザインと重みが気にいっていた)と、鋭い刃先をもった折り畳み式のナイフ。鹿のを剥ぐためのもので、手のひらにのせるとずしりと重く、刃渡りは12センチある。外国旅行をしたときのみやげものなんだろうか。やはり机の引き出しの中にあった強力なポケット・ライトももらっていくことにした。サングラスも年齢をかくすためには必要だ。濃いスカイブルーのレヴォのサングラス。[6]

カフカ少年は刃渡りが「12センチ」もある「鋭い刃先をもった」「ナイフ」[7]を持って家出する。世の中で一番タフな少年として自分を規定しているカフカ少年が、家出の時、敢えて刀を持って出なければならなかった理由は明らかではない。

小説に登場するそれぞれの「ナイフ」を現わす意味は皆違うが[8]、一つの共通

6) 村上春樹、前掲書、14頁

7) 加藤典洋は、『海辺のカフカ』の公式ホームページに設けられた村上春樹と読者との質疑・応答の場で、高松に向かって「バスの中で『カラスと呼ばれる少年』はナイフと表象され、リュックの中に入っていたので、座席は一人分でもよかったのです」と言及しながら、「カラスと呼ばれる少年」の章では、彼が「鋭いくちばし」でジョニー・ウォーカーのような男を攻撃する場面を指摘している(加藤典洋『村上春樹 part 2』荒地出版社、2004、167~168頁)。カフカ少年の精神的分身である「カラスと呼ばれる少年」が「ナイフ」に取り替えることになっている点に注目する必要があろう。

8) カフカ少年が初めて家出をするとき持っていくのは、「ジャックナイフ」(村上春樹『海辺のカフカ』(上)、新潮文庫、2005、14頁)であり、ナカタさんがジョニー・ウォーカーを刺すのは、「大型のナイフ」(上 314頁)であった。ジョニー・ウォーカーは鋭い「メス」(上 313頁)で猫の腹を裂き、カフカ少年が森の中に足を踏み入れるとき、彼のポケットには「狩猟用のナイフ」(下 351頁)が入れてあった。また、星野さんはナカタさんの口から出てくる白いものを「包丁」(下 500頁)で切断する。「ナイフ」というものは、カフカ少年が田村浩一の死について

点があるとすれば、それはいつか「ナイフ」がそれぞれの状況において多様な暴力性を現わすための道具として位置づけられていることだ。父を殺害し、猫を殺すこと、自害すること、そして白いものを抹殺させるのは皆ナイフの暴力性で具現されている。すべての事件の事始めである田村浩一の死がナイフで始まり、白い物をナイフで切断することによって終わるという、ナイフは一種の暴力の循環を媒介するもの[9]として存在する。

そのナイフで父が殺害されることで、カフカ少年は父が与えた予言の存在を否定しようとする。父という存在、予言の発信地を消去することで彼との関連を切り、これから起こることが予言に属しないと主張したいのだ。佐伯さんとさくらさんとの関係が自分の意志によるものだから、罪責感も責任も持つ必要がないと言いたいのかもしれない。

しかし小説の中でこのカフカ少年の父殺しへの衝動は明確に現われていない。田村浩一の死がカフカ少年によることだと断定しにくいからだ。

> でも僕にはそれほど確信がもてない。父が殺されたのは、頭の中で計算してみると、ちょうど僕のシャツにべったりと血がついていた日なのだ。[10]

> 「その血を僕がどこでつけてきたのか、それが誰の血なのか、まったくわからない。僕にはなにも思いだせない」と僕は言う。「でもね、メタファーとかそんなんじゃなく、僕がこの手でじっさいに父を殺したのかもしれない。そんな気がするんだ。……」
>
> ―中略―
>
> 僕は言う、「僕は夢をとおして父を殺したかもしれない。とくべつな夢の回路み

確信することのできない状況の中で、両者を繋げる媒介物として提示されている。「大型のナイフ」と「メス」とは、他人に対する暴力行使の道具として位置づけられ、「狩猟用のナイフ」は自分に対する暴力を行使するための道具として用いられている。星野さんが白いものを「圧倒的な偏見をもって強固に抹殺する」とき使われる「包丁」は、あるものに対する贖罪も断罪も、あるいは生死の切断による関係性の段落を意味するものとして、重要な道具的・媒介的性格を持つ。

9)「戦いは自体の中で成長していく。それは暴力によって流された血をすすり、暴力によって傷ついた肉をかじって育っていくんだ。戦いというのは一種の完全生物なんだ。君はそのことを知らなくちゃならない」(村上春樹『海辺のカフカ 下』、新潮文庫、2005 348頁)

10) 村上春樹、前掲書、416頁

たいなのをとおって、父を殺しにいったのかもしれない」[11)]

「父を殺」すという予言の成就は、カフカ少年自身の推測による告白、またジョニー・ウォーカー殺害事件と構成上重なっている。しかし実際には、カフカ少年の生霊がナカタさんを動かしたり、ジョニー・ウォーカーが田村浩一と同一人物であることは明らかに提示されていないので、田村浩一の死をめぐってのすべては疑問であるままである。

だが、「予言」はカフカ少年による父親殺しが当然起こるかのように描くことで、その予言の内容、カフカ少年の暴力衝動を隠蔽している。また同時にそれを確信できないというならばカフカ少年は暴力的ではないと言う、二重の隠蔽構造を成り立たせている。

1-2 近親相姦というタブー破壊の意志

母と交わるという予言に関して隠蔽されていることは、近親相姦というタブー破壊の意志だ。カフカ少年は甲村図書館の一室で佐伯さんと関係を結ぶ。忘れてはならないことは、カフカ少年が自分の仮説の中で母と「思っている女性」と性関係を結ぶということだ。にもかかわらず、性欲による近親相姦は回避されていない。

近親相姦が問題になるのは、それがどのようにして起ったかということよりむしろ社会で既にタブーとして存在するという点だ。社会システムの崩壊を阻止するためだという所以で成立し、それが実際には個人を抑圧する装置として作動していると言えよう。しかし近親相姦がタブーである以上それは共同体構成員たちの合意と実践の意志に根拠したことと考えなければならないだろう。したがってカフカ少年が近親相姦のタブーを破壊しようと思うことは、共同体の成立基盤とルールに対する個人的挑戦であると同時に、社会的合意を無視することになり、共同体を構成する一人一人の存在、それ自体を無視する暴力的行為に他ならない。

11）村上春樹、上掲書、431頁

そうだとしても、佐伯さんとの性関係が深刻に受け止められていないことは、カフカ少年が彼女と関係を結ぶ時、彼女が眠っていると描かれているからだ。

> 彼女は手をのばし、僕の髪に手を触れる。指が僕の短い髪のあいだをまさぐる。それはまちがいなく現実の手だ。現実の指だ。それから彼女は立ちあがり外から射しこむ淡い光の中で、ごく当たり前のことのように服を脱ぎはじめる。.....彼女は眠っている。僕にはそれがわかる。たしかに目は開いている。でも佐伯さんは**眠っている**のだ。彼女はすべての動作を眠りに中でおこなっている。12)

予言はカフカ少年が当然、母として設定されている女性と関係を結ぶはずだという認識を与えた後、その対象が実際母なのかどうかという不確定性と彼女が「眠っている」ように提示することで、性関係を持った責任を曖昧にさせてしまう。カフカ少年が持っている近親相姦というタブー破壊への暴力性を隠蔽している。

1-3 性欲と「レイプ」という性的暴力

さらにカフカ少年の持っている暴力性は、姉との関係において最も露骨な形で現われる。姉はカフカ少年には母から愛されなかった自分と対照的な存在で、自分の愛する人を奪った対象であるとも言える。あるいは肉親という、いつも心の中で再会を渇望する、愛情の対象でもありえる。したがって姉と関係を結ぶということは自分の存在を確認し、欠乏している愛情を埋める過程であるかもしれず、母という存在を奪った対象に対する暴力ひいては家族を成すすべての構成員に対する暴力行使としても見ることができる。

ここで注目しなければならないのは、カフカ少年と関係を持つ姉が母とお互いに違う方式で予言を実行していくことだ。すなわち、姉ではないという「反証がないから」姉と考えられるさくらさんは、佐伯さんとは違い、カフカ少年と「レイプ」に近い方式で性関係を結ぶ。カフカ少年は夢の中で「ひどい喉の渇きを感じて」水を飲みに出てからさくらさんのベッドに近付く。

---

12) 村上春樹、『海辺のカフカ 下』、112頁、強調原文

あるいはそれは夢じゃないのかもしれない。すべてはあまりにもクリアで、一貫している。曖昧なところはぜんぜんない。それをなんとよべばいいのかわからない。しかし現象としてみれば、それはもちろん夢以外のなにものでもない。.....

僕は夜中に激しい喉の渇きで目を覚まし、寝袋から出て水を飲む。グラスに何杯も水を飲む。5杯か6杯か、それくらい。僕の皮膚には薄く汗の膜がかかり、やはりひどく勃起している。ボクサーショーツの前は硬く持ちあがっている。それは僕とはべつの意識を持ち、べつのシステムにしたがって機能しているべつの生き物のようにみえる。僕が水を飲むと、その一部は自動的にそいつが受け取ることになる。.....

.....時刻をたしかめようとするのだけど、時計は見あたらない。たぶん夜のいちばん深い時刻だ。時計さえどこかにうしなわれてしまう時刻だ。僕はさくらのベッドの横に立つ。街灯の明かりがカーテン越しに部屋に入っている。彼女は背中を向けてぐっすりと眠りこんでいる。[13)]

カフカ少年の体は「渇きで」いっぱいである。「べつの意識を持ち、べつのシステムにしたがって機能しているべつの生き物のように」「勃起している」ペニスは「渇き」を感じ、偶然さくらさんのベッドに向うようになる。ドミニク・ダレラックの強姦衝動に関する分類を次に見てみよう。

第三に、爆発力が非常に強くて、快楽本能と現実の原則が「闘争的な躍動性」を起こす。これは苦痛の勃起だ。このような勃起は自慰行為で鎮静させることができる。ところが状況が与えられれば、そこを通過する最初の女性に対して強姦を行うことがありえる。[14)]

引用文は、無意識に形成された強い性慾が意識と疏通しながら放出される程度によって性欲を三つに分類している中で、最も強い段階の性欲を説明している。カフカ少年の「勃起している」ペニスは「闘争的な躍動性」を起こすほど「渇き」を感じている。気を失って神社で意識を取り戻した日、不便で苦しい勃起はさくらさんからの自慰行為で「寝か」してくれたが、今のカフカ少年が見て

13) 村上春樹『海辺のカフカ 下』、306～307頁
14) ドミニク・ダレラック著、ハテファン訳『強姦衝動』同心圓、1995、62頁

いる彼女は「ぐっすりと眠りこんでい」て、「状況は与え」られている。性慾による「レイプ」という女性に対する暴力性こそ姉を犯す最大の理由で、これを仕方ないことと思う時、初めて彼は暴力的な存在として現われる。にもかかわらず、これをあまり暴力的と感じないようにしむける理由を、公共場所での死体を検屍する医者の報告書を通して指摘した、ジョルジュ・ビガレロの研究を見て見よう。

> 彼らは強姦や性的虐待の証拠を探すつもりもないまま死亡のみを説明しようと努力したり自然死の表示たち、たとえば1783年5月1日「唇の合部位が裂けたまま」発見された女の子の場合のように負傷や傷部位だけ強調させたりするだけで終わる。殺人だけでも充分に深刻なので強姦はその陰に消去させられる。
> (中略)
> 強姦は他の暴力行為との類似点以外にも、何種類もの特殊性を持っている。強姦は固有な一つの視覚、すなわち強姦の暴力的イメージをより最小化させようとする視線の対象になっている。強姦を眺める当時の道徳は強姦という行為が持っている残酷性を弱化歪曲させ、ひどい場合は消去してしまう傾向があった。[15]

さくらさんに対する「レイプ」を「予言」の実現という枠の中で考えるとき、その意味は縮少されてしまう。一番目の予言を通じて、カフカ少年はレイプよりもっと大きい犯罪と認識されている「殺人」をしたと見えるからだ。予言に属する殺人を既に行ったから次の事件でやはり、予言が成就するかどうか、あるいは「誰」を犯したかに注目するだけで、その底辺に隠れているカフカ少年の暴力性に対しては注目しなくなるのだ。殺人そして二つの性関係をすべて含む「予言」という枠組みによって、また事件それぞれにおいて人物や現実が曖昧に提示されることで、カフカ少年の暴力性はいつのまにか隠蔽される。

---

15) ジョルジュ・ビガレロ著 イサンヘ訳『強姦の歴史』当代、2002、40~41頁

2 暴力的「関係」を隠蔽する主客関係の曖昧さ

2-1 応えるしかない「関係」の試み

カフカ少年の暴力性、そしてそれを隠蔽する「予言」と共に忘れてはいけないのは、『海辺のカフカ』の中の事件に関わる対象たちの間で「関係を結ぶこと」それ自体がとても暴力的に成り立っていることだ。行為自体、暴力性を抱いているものでもあるが、重要なことは関係を結ぼうとする側も、その相手も関係を持とうとする試みから自由でないことだ。佐伯さんはカフカ少年と共犯の関係を形成していたから敢えてその関係から逃れる必要がなかったが、ナカタさんにはジョニー・ウォーカーが提示する殺人という関係から、さくらにはカフカ少年がした強姦という関係から逃れる方法を見つけることができない。他者とのコミュニケーションに無関心だったことで知られる春樹の初期作と比較すると、『海辺のカフカ』における関係の結び方がもう少し明確になるだろう。

処女作『風の歌を聞け』の場合、関係結ぶことはラジオ放送で提示されている。「ON」と「OFF」が絶えず繰り返してラジオDJとリスナーはお互いに関係を結ぶ。「OFF」の世界は極に個人的な空間で、ラジオDJとリスナーとの関係の一時的な断絶、あるいはラジオDJによる一方的な関係断絶行為と見ることができる。しかしリスナーの立場から言えば、自分がラジオDJとの関係を望まない場合、そのままラジオを消せばいい。したがって、たとえ意志伝達の内容はラジオDJからリスナーへの一方向性を帯びると言っても、関係を結ぼうとすることに対する意志と断絶の可能性はお互いに開かれていると言える。

『羊をめぐる冒険』の場合、翻訳会社を経営した主人公の「彼」に、何かに対する追跡を要求しながら変な「男」の提示する状況は次のようである。

> 「しかしあなたがたのスケールの会社にとってはこのようなトラブルから受けるダメージが極めて大きなものであることも容易に想像できます。幸い我々は―あなたもご存じのように―この業界では少なからず力を持っています。だから我々の第二の希望を叶えていただけ、その担当者が我々に満足のいく情報を与えてくれるなら、我々はあなた方の受けたダメージにたいして十分な埋め合わせをさせていただく用意があります。おそらく埋め合わせ以上のものです。」[16)]

男が彼に提示するのは男の「希望」だが、もしその希望が成就したら彼には今より良い補償が待っている。たとえ彼が男から提示された、男との間にだけ存在する関係結びに応じないとしても、「彼」にはそれ以上失うものがない。関係を結ぶか結ばないかにおいて自由が与えられており、それは二人の関係の断絶を意味する。『風の歌を聴け』と同じよう、意志は一方的に伝達されるが、相手はそれを拒絶することができるので自分の意志を貫く可能性は開かれていることだ。

それに比べジョニー・ウォーカーがナカタさんに強要する状況は次のようだ。

> 「戦争が始まると、兵隊にとられる。兵隊にとられたら、銃砲をかついで戦地に行って、相手の兵隊を殺さなくてはならない。.....君が人殺しが好きとか嫌いとか、そんなことは誰も斟酌しちゃくれない。それはやらなくてはならないことなんだ。.....」
>
> ―中略―
>
> 「というわけでつまり、君はこう考えなくちゃならない。**これは戦争なんだ**とね。それで君は兵隊さんなんだ。今ここで君は決断を下さなければならない。私が猫たちを殺すか、それとも君が私を殺すか、そのどちらかだ。君は**今ここで**、その選択を迫られている。もちろんそれは君の目から見れば実に理不尽な選択だろう。しかし考えてもみてごらん、この世の中のたいていの選択は理不尽なものじゃないか」[17)]

ジョニー・ウォーカーが提示する選択肢は、彼が提示することを選択するしかない。ジョニー・ウォーカーの望む選択をすればナカタさんは、「理由もなしに人を殺してはいけない」という自分のタブー及び「殺人」という社会的タブーを破った人間になる。にもかかわらず、猫の命を救うために選択を強いられる。猫殺しは本来ジョニー・ウォーカーが犯してはならないことなので、その否定的展開を最小限で防ぐためには、ジョニー・ウォーカーが提示する関係結びに応じるしかない。ナカタさんはその関係結びを拒絶することができない状況に置かれ

16) 村上春樹『羊をめぐる冒険』講談社文庫、2004、102頁
17) 村上春樹『海辺のカフカ 上』300~301頁、強調原文

る。一方的で暴力的な構造が既に成立しているのだ。『海辺のカフカ』は他人に対する暴力的行動、一方的な関係結びの要求で成立している小説と言える。

2-2「予言」實行における加害者と被害者の関係

しかしそういう暴力的な関係結びの試みはあまり目立ってはいない。それは各事件の加害者として設定された人物とその暴力の被害者として設定された人物の主客関係がはっきり現われないまま、「予言」の実行として受け止められるように仕組まれているからである。三つの事件[18]で被害者に設定されている人物たちは、各々事件に接する方式や加害者として設定された人物との関係結びが少しずつ違うように設定されている。にもかかわらず、「予言」という枠組みは皆同じ方法で成り立っているように描かれている。

ジョニー・ウォーカー殺害場面で、彼は何のためか死を望んでいる。

> 「ただひとつ、君にとっての救いは－もし君が救いなんてものを必要とするならということだが－私自身が心から死を求めているということだ。私が殺してくれと君に頼んでいるんだ。お願いしているんだ。だから君は私を殺すことに何ら良心の呵責を感じることもない。なにしろ私が望むことをやるだけなんだからね。そうじゃないか？ 死にたくないと言っている相手を無理に殺すわけじゃない。むしろ先行と呼んでもいいくらいのものじゃないか」[19](上 301～302頁)

ジョニー・ウォーカーがなぜそれほど死を望むのかはわからないが、彼は「戦争」のような「殺人」を選択するしかない極限状況を提示している。果たして「奇妙な自発的被殺事件」の誰が加害者で誰が被害者なことだろう。逆転された被害者の姿をはっきり現わすことで、加害者と被害者の仕分けを曖昧にさせ、事件を「仕方ないこと」として描き出すことによって、『海辺のカフカ』という作品は行為の責任を消去してしまう構造を持っている。

そういう関係はカフカ少年が佐伯さんと性関係を結ぶ時、明確に現われる。佐

---

18) 三つの事件とは、ジョニー・ウォーカーの殺人事件、佐伯さんとカフカ少年との二番目の性関係、そしてカフカ少年がさくらさんをレイプすることだ。

19) 村上春樹 前掲書 301～302頁

伯さんもやはりカフカ少年が自分の息子かも知れないという漠然とした不安にとらわれているが、結局性関係を結ぶことを「仕方ないこと」と思ってしまう。

> 「……昨夜私たちがやったことが、正しいことだったのかどうか、私にはわからない。でもそのとき、私はもうむりになにかを判断するのはよそうと心をきめたの。もしそこに流れがあるのなら、その流れが導くままにどんどん流されていこうと思ったの。」[20)]

自分の頭の中で息子であるかも知れないと思っている男の子と性関係を持つことが個人と社会の倫理を離れて「むりになにかを判断するのはよそう」と表現されている。母は自分を愛しなかったのだろうか、という疑問を解いていく過程で、同じ自分の意志による性関係だと思うことでカフカ少年は彼女とあまりにも自然に関係を結び、その過程で彼女はあまりにも自然に彼に同意している。

佐伯さんは社会的存在である人間として「正しいことだったのかどうか」に対する判断を欠如し、カフカ少年はそういう判断欠如を黙過している。まるでお互いに愛する恋人のように二人は結ばれ、彼女も性関係を願っていたように描かれている。両者を対等な位相の主体として並立させることで加害者と被害者の差異は自然に消去され、そこに内在している近親相姦というタブー破壊の可能性は隠蔽される。

そして、さくらさんと性関係を結ぶ時にはじめて、事件の加害者と被害者ははっきりと現われる。

> **「でもこれだけは覚えていてね。君は私をレイプしているのよ。君のことは好きだけど、これは私の望んでいるかたちじゃない。私たちはもう二度と会えないかも知れない。先になってどれくらい強く会いたいと思っても。それでいいんだね？」**
> **君はそれには答えない。君は思考のスイッチを切る。[21)](下 271頁、ゴシック原文)**

ここで明らかなのは性暴行加害者及び被害者としての男性と女性の区別では

20）村上春樹『海辺のカフカ 下』新潮文庫、2005、197～198頁
21）村上春樹 上掲書 271頁、強調原文

なく、ある行為の　加害者とそこに係わる被害者の関わり方であろう。にもかかわらず被害者としてのさくらさんが加害者であるカフカ少年にレイプされるという暴力的な事実は、「予言」の成就という大きな流れの中で、すなわち前に起こった事件から加害者が少しずつ明確に加害者性を持つようになる過程の中で、その相違性を喪失してしまう。一番目の予言成就する時で被害者の意志が加害者の意志であるように描かれ、二番目の予言で加害者と被害者の共犯的な関係が形成されて、最後の予言成就の時浮べる、加害者の被害者に対する極めて暴力的な行為は「予言」という枠組みの中で明確に前景化しない 。

3. 結論 – カフカ少年は「治癒」されるのか

『海辺のカフカ』の結末の最も大きい疑問点は、カフカ少年は「癒」されるかということだ。カフカ少年が東京に帰るになる決定的なきっかけは、「入り口」の内側の世界で会った佐伯さんを許すという他人の反省によって、「心の中で、凍っていたなにか」の「音」を聞くことができたからだ。

> 「佐伯さん、もし僕にそうする資格があるのなら、僕はあなたをゆるします」と僕は言う。
>
> **お母さん、と君は言う、僕はあなたをゆるします。そして君の心の中で、凍っていたなにかが音をたてる。**[22]

しかしカフカ少年が彼女を許すようになるまでの行為を、果して治癒の過程として見ることができるかは疑問だ。彼が実際に予言を実践したのなら彼はかけられた呪の予言を避けることができない、自由な意思決定が不可能な存在であることを現すと同時に、他人に対する「加害」を通じて自分を「治癒」するというアイロニーを露呈するからだ。またもしそれが実際に起こった事でないなら、彼は結局何もせずに癒されたわけなので、想像力それ自体だけに責任があ

22) 村上春樹 上掲書、471頁、強調原文

るかないかの問題にすべては帰結されるはずだが、これも『海辺のカフカ』は小説の中で両者をすべてを提示することで明らかな結論を避けている。

> 彼女はおかしそうに笑う。「でも、よくわからないな。そんなの黙って勝手に想像していればいいんじゃない。いちいち私の許可をもらわなくたって、君がなにを想像しているかなんて、私はどうせわかりっこないんだから」(上、191頁)

> 「すべては想像力の問題なのだ。僕らの責任は想像力の中から始まる。イェーツが書いている。In dreams begin the responsibilities－まさにそのとおり。逆にいえば、想像力のないところに責任は生じないのかもしれない。このアイヒマンの例に見られるように」(上 277～278頁)

多くの韓国の読者たちが『海辺のカフカ』を春樹本人が韓国語版序文で明らかにしたことのように成長小説[23]として読むか、小森陽一が分析するように第2次世界大戦と戦後責任を含んだテキストとしてで読むかは分からない。しかし、学校から、父から、また「予言」から逃げようと思ったカフカ少年が、結局個人的な暴力衝動によって他人に振り回した暴力を「仕方ないこと」として心に刻んでおくことが、果たして「成長小説」として成り立つことができるかは疑問である。

---

23)「人間は誰も祝福を受けたり、呪いをうけたりします。そしてこの小説の中の15歳少年のものがたりは拡大されたり、縮小されたりまた変形される形で生を体験していくとも見えるだろう。田村カフカ君は一人で、誰からも助けられることができない、実に孤立無援の状態で出家し、索漠な大人の世界に乗り出すことになります。―中略―
彼は世界の終りまで行って再び戻ってくることになります。そして返ってくるときにもう彼は先のカフカと違う、もう異なる少年に変えられているのであります。彼は次の成熟な段階に進入した人になっているのです。」(村上春樹 著、金春美 訳『海辺のカフカ-上』文学事象社、2003、韓国語版 序文 6～7頁)

참고문헌

加藤典洋(2004)『村上春樹 part 2』荒地出版社、168～169頁
小森陽一(2006)『村上春樹論』、平凡社 18、24～26頁
村上春樹(2004)『羊をめぐる冒険』講談社文庫、102頁
_____著、金春美 訳(2003)『海辺のカフカ(上)』韓国語版 序文、文学事象社、6～7頁
ジョルジュ・ビガレロ著 イサンヘ訳(2002)『強姦の歴史』当代、40～41頁
ドミニク・ダレラック著、ハテファン訳(1995)『強姦衝動』同心圓、62頁

❖ 투고일 : 2007. 6. 30.
❖ 심사일 : 2007. 7. 30.
❖ 심사완료일 : 2007. 8. 13.